

立野先生、伊藤先生、ありがとうございました。
2011年11月20日に行われた日本語部宣教23周年記念報告



今年の11月で私達 LCR 日本語部は宣教23周年を迎えた。高塚牧師から始まって、日本福音ルーテル教会から何人かの牧師がこの土地で宣教をされた。この教会でキリストの福音に初めて巡り会った日本人も多い。最後に日本に帰国されたのは伊藤牧師であった。伊藤先生は2年前に帰国されてからも、私達日本語部を引き続き祈りに覚え、現牧師である岸野先生と私達日本語部を海の向こうから応援して下さい。伊藤先生を再びこの教会にお迎えし、共に23周年を祝える幸に与り、心から感謝である。又、去年の宣教記念特別礼拝において説教をされた日本福音ルーテル教会事務局長、立野泰博牧師が、伊藤先生と一緒に訪米され、今年も素晴らしいメッセージを私達にプレゼントして下さい。

3月11日に突如として東日本を襲った地震と津波からの復興に未だにあくせくしている現地に、立野先生は3月の中旬に出向かれ、「となりびと」という支援団体を設立された。その後伊藤先生が現地にて合流された。お二人の労を惜しまぬ支援活動は今もそしてこれからも続けられて行く。今回はお二人から「現地の生の声」を聞く事ができた。

立野先生は20日の主日に、8時半の英語部の礼拝から出席された。Zimmermann 主任牧師が先生を紹介された後、3分間のパワーポイントを用いて石巻の現在の様子を皆さんに紹介した。最後のスクリーンに「もうゆるしてください。。。、

Please forgive me」という言葉があった。私は先生の通訳をさせていただいていたが、その時にその言葉を通訳しながら、何故被害者である方が、「ゆるしてください」と言うのか解らなかった。立野先生は引き続きこう語られた。「私は、3月中旬から現地に入りましたが、今までで一番印象に残った言葉は、ある若い

お母さんから聞いたこの『もう、ゆるしてください』という言葉だったんです。彼女は津波の中で、必死に二人の子供を抱えて守りました。でもその為には彼女の横を流されて行った彼女の両親、友達を助ける事ができなかった。毎日その夢を見るそうです。だから『もう、ゆるしてください』、なんですね。私達は、赦すことができるのはただ一人、イエス様だけだ、という事を知っています。だから私も伊藤先生もこれからその事をこの方達に伝えて行かなければならない、あなた方はもうすでにゆるされているんですよ、愛されているんですよ、という事を伝える為に、これからも支援活動を続けて行きます。そういう人達の側に寄り添ってあげられる事、それが「となりびと」なんです。」と語られました。さらに、日本語部の礼拝では、20分のパワーポイントを用いながらのメッセージを語られ、次から次へと現地の様子を見せてくださった。私が一番胸を打たれた写真は、あるおばあちゃんが小学校に向かって座っている後ろ姿と、その横に置かれた二つのランドセルだった。このおばあちゃんは孫を捜して学校まで来たそうだ。二人の孫達も津波にさらわれてしまったけれど、おばあちゃんは二人のランドセルを見つけたそうだ。立野先生はおばあちゃんに自分は何もしてあげ事が出来ない、何ができるだろうか、と苦しんだ時に、そのおばあちゃんの側にそっと寄り添っているキリストの姿を見た、と語られた。そして自分も小さなキリストになって、何もできないけれどもこの人達の側に寄り添っていよう、とそのとき決心された。そして私達にも立野先生は「となりびと」になってください！と言われた。その場に居ない私達は、「祈り」によって寄り添うことができる。「祈りのとなりびと」になろう！私が強い感動を覚えた瞬間だった。先生のメッセージから受けた感動は、これからも失せる事無く、私達一人一人の中で生きて行くに違いない。

伊藤先生は、この日朝早くからトランスの礼拝に出席されていた。11時にはLCRに戻られ、お昼の祝賀会には両牧師が立野夫人、華美さん（立野先生の長女）と一緒に出席された。英語部日本語部と合わせて50人以上の出席者だった。会食の前に、Friendship Task Force (FTF)から、両牧師に二千ドルの義援金が手渡された。これは今年7月30日に行ったJapan Festivalで、東日本大震災の義援金にと集められたお金である。この微々たる金額が、少しでも現地の人々のためにお役に立てれば幸いである。会食では伊藤牧師が代表で挨拶をされ、現地の人々の状況を語られた。会食後、来年の長崎ミッションツアーのミーティングを持ち、両牧師が来年の10月にLCRから日本を訪問するグループに長崎五島列島の説明をしてくださった。ただでさえお忙しいお二人が来年度の私達のツアーの為に苦勞下さり、頭が下がる思いであった。

立野先生は翌日月曜日の朝早く帰国された。日本福音ルーテル教会の事務局長を勤められる立野先生は、帰国といってもすぐに帰宅はできず、山口県から広島と講演に回られるそうだ。すでに山ほどのお仕事待ち構えているに違いない。伊藤牧師は一週間の滞在ということで、火曜日の愛子さん宅で行われているアーバインの家庭集会でお話をしてくださった。先生は短い時間の中に私達に伝えたい事が、あれもこれもと沢山あったにちがいない。昔から何でも手帳にメモっ

ている先生は、忙しそうに手帳のリストを見ながら、次々に内容の深いお話をされた。

主題はローマの信徒への手紙3章の25節から「神の義」であった。伊藤先生は「神の義」を「神の思い」と言い換えられた。それは神がキリストの血によって私達の罪を全部見逃しゆるしてくださり、その真実によって私達が義となる、つまり神の真実によって私達をあらしめんが為の、神の私達への深い思いがここにあるのである。キリスト教の誇れる所は弱さであり、コップの水を全部空っぽにした時に神の思いを知る事ができる。ただ「信じなさい」と繰り返し言うのではなく、その神の思いを受け止めることが信仰なのである。時として私達はその神の思いが解らずに、何故だろう、どうして自分がこのような思いをするのかと、疑問に思う事がある。Question すること、何故だろうと質問する事は大切なことだが、それ以上に大切なのはその疑問を暖めておく事である。私達人間は往々にしてすぐに回答を出そうとする、答えが見つければ安心できるからだ。しかし、本当はすぐに答えを探そうと焦るのではなく、その疑問を暖めながら神の思いを待つのが信仰なのである。暖めている間に解ってくる事もある、自分が成長して行くのがわかり、自分が生かされている事が解ってくる。伊藤先生の話は奥深く、私達は話に齧り付くかのように真剣に聞き入った。最後に伊藤先生は被災地の話に戻された。黙示録の意味が「神様が涙を拭ってくださる」という意味であるように、きっと被災地の人々が涙をしなくても良い時が来る。最後に先生はこう言われた、「聖書の中にある『平和』とは、『水が居るべき所でとどまっている事』という意味です。そのような平和な時が来る事を共に祈りましょう。」確かに恐ろしい津波は居るべき所に居る水がその場を離れて人々を襲ったのだ。それを体験した人々は、口には出せない不安を心に抱いて毎日生活されている事だろう。私達には想像もできない。その方達の心に一日も早く平安がもどるように、私達は「祈るとなりびと」を続けて行こう。そして神様の思いが全ての人々の心に、それぞれの異なった形で語られる時が来る事を祈ろう。

僅か数日ではあったが、私達は両牧師から沢山の忘れられないメッセージをいただいた。正に心の糧を私達に届けてくださった両牧師に、心からお礼申し上げます。

芙美 Liang 記録